月桃（げっとう）通信 No18　2020 年 1 月 7 日

――― 希望は愛から生れる ―――

石原艶子

愛は忍耐強い、愛は情け深い、ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない、礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない。――――――信仰と希望と愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である。（新約聖書　第Ⅰコリント 13 章から）

★初興し（はちうくし）のこと―２０２０年が明けました。元日の朝７時、辺野古の浜に２００人程が集い来て、初興しの集会を持ちました。浜を見渡せば、あれほど豊かにあった貝ガラもサンゴのカケラも今はなく、砂でかためられた浜は駐車場となり、浜をうめつくしていた浜昼顔も今は上の方に少し残るだけ。2011 年頃の、フェンスも何もなくただ基地の境界線に張られたバラ線だけだった浜の姿が懐かしく思い出され、悲しくなりました。初興しでは地元の慣例に従って祈りが献げられ、三線の調べに合わせて踊り、代表者のスピーチなど。海ではカヌーチーム（辺野古ブルー）の仲間達のみごとな海上アピール行動があり、整列した姿が辺野古の海と一体となって厳粛さも漂うほど、チームワークの美しさ、力強さを表現してくれました。浜から声援を送る私達とひとつになっての仕事始めでした。カヌーチームの一人一人の命が危険から守られますように祈りました。雲は厚く元日の太陽を仰ぐことは出来ませんでしたが、二段になった雲間からの光がいく筋も光の帯となって海に注がれる創造美はまさに神のもの。光の帯は天使の梯子、だと、友人と共に感動した瞬間でした。天使の梯子は辺野古の海を慈しみ深い優しさで包み、見守ってくれている神の愛の光でした。2020 年も闘いは続きます。最後にみんなで手をつなぎ、輪になって山城博治さんと共に博治さん作詞の「沖縄今こそ立ち上がろう」を歌いました。

♪沖縄の未来は沖縄が開く　戦さ世を拒み平和に生きるため、今こそ立ち上がろう、今こそ奮い立とう

♪辺野古の海を守り抜くために　圧政迫るが立ち止まりはしない、今こそ立ち上がろう、今こそ奮い立とう

みんなの心がひとつに結ばれたこの時、涙と共に 2020 年を闘いぬく新しい決意がみんなの中から湧き上ってきました。私はこの瞬間、神はこの無垢なる沖縄の民を決して見捨てない、平和を実現する民として祝福し、用いて下さることを確信しました。

★現場から―工事は 1%しか進んでいない、止められるとの力強い発言がある一方で、埋め立てられていく海、ゲート前から毎日入る何百台もの車輌を見ている私達は心折れそうになっているのも事実です。ではどこに希望はあるのか、本当に止められるのか、非暴力で座り込み、既に六年目、私達の活動は確かに進化していますし、一人一人が自己変革をなしとげているのも事実です。座り込みの現場には沢山の歌が生れています。すばらしい作詞家が何人も誕生し、自作の歌を力強く歌います。尊敬するとても小柄の女性Ｏさんは太く力強い声で韓国の「真実は沈まない」を歌います。**「闇は光に勝てない、うそはまことに勝てない、真実は沈まない、私たちあきらめない。」**韓国の民衆の心とつながる瞬間、心が震えます。私たち沖縄は世界とつながっているのだと実感します。機動隊のリーダーは、私達を力づくですぐに排除しようとはせずに私達の歌が終るまで一緒に聞いて待ってくれるようになりました。私達の歌と行動が彼等の心を動かしているのです。私達を排除することを仕事とする彼等にも非暴力で平和を求める行動は、厳

しい現場にも小さな平和を・・・・人と人とのつながりをつくることが出来ることを実証しています。
12 月 15 日、ゲート前に集う私達はペシャワール会の中村哲さんの死を悼み黙祷を献げました。「一隅を照らす」愛に生ききった中村哲さんの柩をアフガンの大統領が共に担いでいる姿に感動しました。安倍総理こそ、担ぐべきではないのですか、と私は言いたいです。ソ連、アメリカと大国の身勝手な介入によって国土を破壊されたアフガンの地で、民と共に用水路を作り、緑の大地を生み出し、アフガンの人々に希望を与えた哲さんの魂は生きていることを私は確信しています。第二、第三の哲さんが現れペシャワール会の活動はこれからも「一隅を照らす」哲さんの心を大切に、前進することでしょう。私も会員の一人として共にありたいと思います。**一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが死ねば多くの実を結ぶ（新約聖書　ヨハネ伝 12：24）**

★今後の課題―――防衛省による 12 月 25 日の発表によると総工費 9300 億円工期は 12 年と、県の試算は２兆 5500 億円工期は２０年～３０年と見通しも立たない。防衛省は税金を使っての工事に国民の反発を恐れ少く見積もって発表したのでしょう。そして驚いたことには、新基地土砂全て県内調達とのニュース。改良工事に必要な砂 350 万立方も県内調達のメドが立ったと言うのです。一体県内のどこから調達するのか、沖縄の陸も海も破壊して基地を造るのか、防衛省はいったん工事を止めて県民と向き合って説明すべきです。そして日本国民は本当に税金を２兆～3 兆円もつぎ込んでこの基地を造ることに賛成なのですか。福祉改革を叫んでいる安倍政権は、辺野古新基地を止めて軍事費を減らせば、すぐにも改革は実現するでしょう。辺野古のことは国民一人一人の問題なのに何故、考えないのでしょうか。何故、自分事とはならないのでしょうか。天皇の即位には国民こぞって祝う一方で、沖縄は見捨てるのですか。大浦湾の軟弱地盤の問題をはじめとして数々の難問題があり、工法変更届には知事の承認が必要です。今一番困っているのは多分防衛省であり、焦っていると思われます。私達は決して諦めず、ねばり強く闘うことが大切です。健康が許す限り、足をひきずりながらも頑張っている沖縄の高齢者の一人一人は「子や孫のために新基地はいらない」と訴え続けています。現場で感じる空気は訳の分らない巨大な化け物が人間を飲み込んでいるような、いったん走り出したら止まらないエネルギーが暴れているような感じです。アメリカに向っては「新基地やっていますよ」という顔を見せながらゼネコンをはじめ利権に群がる多くの人々がいて、やり続けさえしたら利権を得ることが出来る、もはや軍事基地であるか否かは関係ない公共工事と化してしまっているのです。資本主義の末期症状が露呈しています。格差社会は増々進行し、やがて世界は二極化すると予想されています。その先には何があるのでしょうか。人口減少社会が進む日本は、どこへ向っていくのでしょうか。今、一人一人がどう生きるべきなのか考えなくてはならない課題がつきつけられています。この時代だからこそ憲法９条を守り、平和を作る国を目ざすこと、軍事基地をやめて、自然に帰り、土や水を大切にする生き方に変えること、消費生活の形を変えること、そして何より隣人を愛すること、クルド人をはじめ世界で虐待されている民とつながっていくこと、私達が人間としての真実な生き方を求め続ける限り希望はそこに存在するのだと信じます。

★正月明け６日―たそがれて雲間に浮ぶ白い半月　あの先のとがったＦ15 戦闘機が１機、2,3,4,5 機と月を射るかのように飛んでいく。「沖縄に静かな空を帰して下さい」と慰霊の日の詩の中で叫んだ少女の声が空いっぱいに響き渡る。もしやイランとの戦争準備では？不安がよぎる。どうか戦争がおきませんように!!空を仰いで必死に祈る。戦争をしない人間の善を信じたい。神の助けを祈る夕方。